小児科学教室

教室員としては佐野保教授、浜田宗之助助教授（医専教授）森重孝助教授、佐藤昇助手、平野米雄副手、野村仲徳副手、岩崎誠彦副手、平田道子、山田英子両研究補助、富上ミツノ給仕の外、中尾ナツ看護長以下十九名の看護婦が勤務していた。

又当時は空襲に備えて入院患者はなく、只身元のない乳児三名が在室中であつた。

被爆時の状況

佐野教授は来客のため本河内の自宅に居られ、浜田助教授は疎開地の多比良で病臥中であつた。

森助教授、平野、野村副手、大宅看護婦は外来患者診察室で被爆す。野村副手は重傷を負い十二日夜中皮膚科病棟で死亡。

佐藤助手は疎開のため山里町へ帰宅中、岩崎副手は城山町の自宅で結核静養中夫々爆死。

他の教室員も研究室、教室内で被爆し、即死者はなかつたがその後中尾看護長以下八名の看護婦相次いで死亡す。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
助手	佐藤昇
仮卒業生	岩崎誠彦
〃	野村仲徳
看護長	中尾ナツ
四年	井上光子
三年	藤田和代
〃	野口寿栄也
二年	土岐富美子
〃	荒木信子
一年	川上アサヱ
〃	河野鈴子

原子地獄を見る

森　重　孝

昭和二十年八月九日午前七時半頃大学病院へ出勤の途中警戒警報をきき、慌しく自室にかけ込んで、急ぎゲートルを巻き、鉄帽を身近くおいて前夜当直看護婦の報告をきいた。八時三十分頃空襲警報発令、約十五名を容るる小児科教室横穴防空壕へ医員、看護婦、それに育児を加えて待避した。烈日のまぶしい空を敵機か友軍機が知らぬが、数機の爆音が岩屋山から稲佐山の方向へ動いて行つた。防空壕から出てカラタチの垣の辺りに潜んで飛行機の行動を見やると背に負つた鉄帽が夏日にやけて重たかつた。九時四十分頃空襲警報は解除された。

外来患者が五、六名あつたので午前十時三十分頃から医専三、四年生の外来臨床実習を始めた。平時ならば学生達はもうとつくに夏休暇である筈であつたが、戦時中は修学期間を短縮するためと、もう一つの理由はその当時毎日の如く空襲があつた為に講義がまともにできなかつたので、夏期休暇を御破算して講義がつゞけられていた。学生が予診をとつて第一番に持つて来たのは看護婦寄宿舎の舎監をしていた大浦さんの末つ子六才が、腸チフスらしい経過をとつていたので患者には入院治療を約束し、医員平野君には発病届を書いてもらい、学生達には小児期の腸チフスの症状を簡単に話した。次の患者は学生四年生藤井君の妹の長女三才が百日咳を患つてきていたので特診室で診察した。医員野村君が記載をし大宅主任看護婦が診察を介補してくれた。

診察を了えてズボンの小ポケツトから懐中時計を取出して見たときは午前十一時であつた。それから窓辺で手を洗つていた。飛行機の爆音に気がついた。と、その時「ボーン」という激しい音響と衝撃とが、私のからだを打ちのめし、診察室の土壁がおちて私に降りかゝつた。しかし四つん這になれば土を払いのけて起き上ることができた。眼は開くのだが、何物も見えなかつた暗黒の世界に、身体がフラフラして頭の中がじんじんと鳴つた。空気が重たく感じた。呼吸が苦しくなつて、小刻みに吸込む。呼気が苦しかつた。額からは生ぬるいものが湧いて頬を流れ、顎から滴り落ちる。咳が出て口中には粘りつこいものがあふれて口角から流れでた。

死のおのゝきが私の脳裏を包んだ。「呼吸が苦しい。呼吸が止るのではないか。妻子にはもう会えないで死ぬわけか。」からだがわな〳〵震え、凸凹不平の足場から平衡を失つて、二三歩前のめりに突進した。ところが高さ三、四尺の床下から足踏みはづして外庭に墜落し、ぎくつと肝を冷した。暫し立つていると視野が次第に明るくなつてきた。私は眼科病棟に面する庭に立つていた。穴弘法山に気がつくと、たつた今迄居た場所をふりかえつて見るのが非常におそろしくなつて、ふりむきもせず、左上眼瞼部の出血を診察衣を裂いた布片で圧えながら、よろめきつゝ穴弘法山の方へ歩いた。病院裏門では山崎看護婦が顔面鮮血にまみれ、眼球には硝子がつきさゝり、下肢も負傷していて、歩けないと叫びながらわな〳〵震えて蹲つていた。

その傍には小児科臨床実習にきていた川上という看護婦生徒が大腿部損傷で動脈出血がひどく、大声で「助けて、助けて」と泣きわめいていた。私は着ていた診察衣を裂いて彼女の大腿上部をぐつとしめてやつた。気力を失つてぐつたりとなつて重たい彼女を背負つて私は穴弘法山の中腹迄登つた。裏門附近では中田看護婦と私の診察についていた大宅君とに会えた。野田君は頤から頸すぢにかけて血だらけ、モンペは破れて脛がはみ出し、鮮血にまみれ、大宅君は顔面の無数の硝子破片創から血をふいていた。医員平野君は左頬の出血を圧さえ、夫々傷ついた看護婦達を励ましながら私達に続いて登つた。

山の中腹の畑に川上君をねかせ、石ころを探して止血を強力にした。しかし既に出血多量であつたためか、気力は弱り切つてからだがわなわなとふるえ、脈が小さくなつたがどうする事も出来ぬ内に彼女は夕方死亡した。

正午頃風は強い西風となり、大粒の雨がぱらぱら降つた。大学はすさ

まじい音を立てゝ燃え、図書館はものすごい火焔の渦を巻いてもえた。山里町から浜口、竹之久保、井樋口町に亘り一面火の海と化し、火焔は天をこがしていた。大学病院が燃えるときには煙が眼にしみるようになつた。畑の作物や草や木はすべてへし折れて黒く焼こげ土にはニンニク様の臭気があつた。蔓や葉の無い南瓜が黒くやけてごろ〳〵ころがつていた。

大学病院前電車停留所の近くに統制牛乳を販売していた吉田商店という店があつたが、そこの主人は「家内も嫁も孫もみんな焼け死んだつ」と大声でをめきたてた。三十五、六才の女が髪をふり乱して帯を引ずり「こわい、誰か私を抱いて頂戴」と叫びながら走り廻つた。山を上へ上へと登つて行く人、うつ伏にうめく人、仰向けに頷の傷を圧えている人、街の煙の中からは髪の毛を焦がした母親が赤坊を抱いて走り、青年が素裸で喚き乍ら坂をのぼつてくるのやら山には多数の傷者がうごめき苦しみそして火炎の音、呻き声、強風の唸り等が交錯して宗教画で見る地獄図絵そのままの有様であつた。

内科医員（不明）は不思議に無傷で服装も乱れず、救急袋を肩にかけ、私に近づいてきて私の左上眼瞼の傷にヨードチンキをふりかけ、ガーゼをあて私の診衣を裂いて繃帯をしてくれた。午後三時半頃教室の医員平野君に現場の監視をくれぐれも頼んで私は一応本原一丁目の自宅に帰つてみることにした。

爆心地より七〇〇米の地点にあつたので家は全壊し、破けた屋根に畳や柱がのりかかつているという惨状であつた。妻と二人の子どもは家の下敷となつたのであつたが、幸いに即死を免れた。隣の人々とともに横穴防空壕で夜を過したが、壕内は火傷や外傷者の呻き声で殆んどねむれなかつた。翌日隣家の人々の治療に忙しく、そしてまた十一日も方々から呼ばれた。

八月十二日子供達もようやく落着きをとり戻し妻は食器や箱類を拾い集めた。八時半頃家を出て大学へ向つた。途中本原町の防空壕の中から女が現れて私を呼び止め、十才位の女の子が高熱と血便をしていたが急に様子が悪いから診てくれという。既に気力を失い、脉搏は弱く間もなく死んだ。大学の本部や基礎教室の建物は堅牢なコンクリート建さえ倒壊全焼し教室と覚しき所には白骨が累々と横つて居た。一米四方の石の門柱も一側は倒壊し、他側は土台から五寸位ずれて傾斜していた。大学病院は全部鉄筋コンクリート建であつたため外廓丈は残り、しかし窓わくは素つ飛び内部は大部分焼失し、がらん堂となり、残つたところは天井は落ち、物品は散乱し或いは累積して惨たんたる有様であつた。

裏門から小児科の処置室を通して眼科病棟が見え、図書室と標本室との窓からは本や標本等が乱雑に累積して見えた。小児科教室は臨床教室中最も爆心地に近かつたので被害が大きく、教室内で即死したものはなかつたが傷つかぬ者はなかつた。小児科の防空壕近くでは医員平野君が土を盛り上げて作つたかまどで湯を沸かしていた。彼は声を張りあげて小児科看護婦達に私の健在を知らしてくれた。婦長は頸部に第三度の火傷を負い頷面は青黒くむくみ、背部には数ケ所の硝子破片が突きささり左耳朶は打ち貫かれて丸い穴があいていた。他の看護婦達も殆んど皆頷面や手足に傷を負い厚く繃帯をしていた。同じ壕の中では眼科の一看護婦が右下肢の皮下蜂窩織炎であつたろうか、ぶよぶよと腫れ上つて高熱

を発し排尿困難を訴え、呻くやら猛けり叫んで、眼科医が傍に附添い施す術もないという形で見守つていた。

防空壕近くの病院用水タンクの送水モーターの近くに小児科の給仕富上ミツノ嬢が頭は両頬えぐりとられて眼球が見え、右前腕骨は尺骨橈骨ともに骨折し、下肢は外観的には何の傷も見られなかつたが、一側は多分神経損傷のためであつたか、動かすことが出来なかつた。塩酸モルヒネを注射してやつて暫くねむつた後、声高く私を呼ばはり「先の注射をもう一度願います」と哀願するのであつた。同じ場所には大学一年生が三、四名、呻いたり、叫んだりしていたが、その内一名は当日日暮時、容態急変して昇天した。その学生の父親は三日間に亘り方々をたづね探し廻つたが杳として判らず、今朝古賀村の観音様におまいりした甲斐あつて有難くも引合わせして頂いたと、父子抱き合つてよろこぶ様子を見てから二時間経つていたであろうか、ひよつこり死んだ。死体は其処から四、五間隔つた芝生の上に運んで莚を被せておいた。

午後二時頃市内の婦人会から握り飯と梅干とが運ばれてきた。平野君と私とはバケツに縄をつけて用水タンクから水を汲み上げ、それが終ると湯を沸かしながら握り飯をほぼつた。主任看護婦は握り飯をほぐして粥を作り重傷者にすゝめた。小児科教室の庭を囲んでいたカラタチの垣は根こそぎ倒され、別館近くの青桐も悉く倒されていたが、淡成塔とその附近の山茶花は何等の損傷も受けず厳然と立つていたのである。建物の蔭になつていたので、お蔭様でという言葉の通りであつた。仏の力のお蔭様だつたかも知れない。教授室側の入口の階段には学生がうつ伏せに死んでいた。

教授室から廊下にかけては佐野先生の大事に保管されて居られたレントゲンフイルムや教室先輩の文献が山の如く散乱し、地下の調乳室に下る階段の近くには大きい赤牛が息絶えだえに呻いていた。平野君と連れだつて、動物小屋の方から地下室に入り、暗室に貯えてあつた葡萄糖のアンプルと滋養糖とを皆に分配して元気づけてやろうと考えた。

暗室に接する研究室の惨状は言語に絶する。専らTB菌を培養していた孵卵器、腸内細菌培養の孵卵器、遠心沈澱機、螢光燈、ガラス器具等が足の踏み場もない位に荒らされていた。此処で遭難した研究補助員平田道子嬢はよくも逃げ出すことができたものだ。教室員の脱衣箱も悉く倒れ試薬棚、大机等も折重つていた。調乳室には島津製の冷蔵庫、部屋の中央の大机や洗場がでんぐり返つて這入れなかつた。医員野村君は腹部に強烈な爆風を受けて急性腹膜炎を起し、皮膚科の地下室で苦もんしていることを聞いて夕方見舞いに行つた。外科の調教授の御診察を受けたが、施す術もない状況下であつたので、激しい渇きと腹痛とを訴え、もだえ苦しみ、死出の水を飲まして呉れと云う覚悟の言葉も実に哀れであつた。

日が落ちて無気味な大学構内をぬけて、大学グランドを通り家路についた。大学運動場の北側には各教室分担で芋畑をつくつていたのであるが、数名のレントゲン科看護婦達は除草をしているとき遭難した。誰とも見分けぬ程にふくれ上り、一糸纏わない黒い油を塗つたような死体が転つていた。

八月十三日防空壕にいた看護婦達の傷のつけ換えをすまして、小児科と眼科との間の庭を廻つて外来診察室に入れば、受付室から診察室迄が

すつかり焼けて、而も特診室の隔壁がすつかりくずれ落ちてなかつた。北側の婦長室から学生予診室、体重測定室、旧患診察室、処置室に至る迄丸焼けとなり、先輩の方々が心魂を傾けて記録した学生予診室の患者日誌、育児記録は全滅に帰した。北側は試薬標本室より東、南側は医局より東の各部屋は天井は落ち道具一切全壊したが、燃えなかつたことは大助かりであつた。殊に図書は方々に飛ばされ、中には表紙がとれたり破けたりしたけれども、大部分をとりとめたことは有難いことであつた。昨日廊下で喘いでいた大牛は昨夜の内に地下室に移動したらしく調乳室の入口に横たわり息絶えていた。

教授室は天井がおちかゝり、いろ〳〵の物品が雑然と山をなしていた。その上に私の夏服が乗つかかつていて、釘をつきさし「森助教授の遺品」と書いた紙をつけてあつた。私は行方不明という事になつていたのである。調外科が大学本部になつていたが、そこの板壁には職員の安否が記してあつた。

佐野教授　生存　　森助教授　行方不明
佐藤　昇　死亡　　岩崎誠彦　死亡
平野米男　生存　　野村仲徳　重傷

十時頃佐野先生とお会い出来、先生が固く握手して、涙を流して喜んで下さつた時の感激は今だに忘れられない。医員野村君は昨夜死亡した。皮膚科のはづれたドアの上に死体をのせて佐野先生、平野君と三人で庭に運び、石を集めて焼き場を作り、材木を拾い集めて死体の上にのせ、火をつけた。三人は合掌して冥福を祈つた。万感胸に迫つて涙があふれる。時々火加減をみると少いたきぎの間から足がやけて行くのが見えたりした。この火葬の間にも飛行機が飛来し、半分くずれ落ちた防空壕へ平野君と身をかくした。

夕方骨を拾つて花瓶に入れ、医局の机の上におき、木炭で故野村君の英霊と書いた紙をつけておいた。その時分佐野先生が来られて高木教授の御遺骨の分骨を教授室におくから粗末にせぬようにといわれた。この日から各地の救護隊が活動し始め、大学職員の重傷者を優先的に諫早に輸送することになつた。重傷の給仕富上ミツノ嬢は明るい内に運ばれて行つた。小児科の婦長以下の看護婦は明朝行くことになつていた。

十三日正午頃湯江の疎開先で病気のため静臥していられた医専浜田教授が来られて十五日に広島県の亀というところに入隊すべしという海軍の召集令状を受けたが、折尾以遠鉄道線路破壊のため行けずに困つていらるる事と、八月九日午前〇時ソ連軍が参戦したという新聞記事とを話して下さつた。誰が話したという記憶はないが、日本軍二十三機がニューヨークを空襲して大被害を与え米国人を震駭せしめたというデマも聞いた。昼過ぎ学部三年の渡辺君からカンコロ餅の一片を貰つた。その旨い味と感謝の気持ちは忘れられない。夜は小児科防空壕の入口に藁を敷き、中尾婦長と動物屋の松永という女と私と三人で一枚の毛布を被つてねた。晴れ渡つた空には無数の星が降る如くまたたいていた。角尾学長や山根教授、松下助教授等の重態の模様、安否を気使う知人の顔、顔が走馬燈のごとく浮かんで来てなかなかねつかれなかつた。翌日早朝シャツが夜露にしめつて風邪気味、鼻汁をすすりながら、精神科の渡廊下の壊れ落ちた板ぎれを拾い集めて火をたきつけ、湯を沸かしたり、昨夜残りの握飯をほぐして粥をつくつた。大宅、谷口看護婦は病院構内に唯一

ケ所水の出る水道栓があるといつて汲んできた。

病院構内に朝日が柔く日射す頃、家に帰ることにした。大学構内の石畳の通路はようやく通れる。衛生学教室の講堂には未だ焼死体が累々とし、解剖学教室にも数個の黒い肉片をつけた頭蓋骨が転つていた。グラウンドのスタンドは石垣がくずれ落ち、巨木悉く折れ、裂け、烏が二、三羽飢え迫るような声で鳴いている風景は漢詩「寒山寺」月落烏鳴霜満天をふつと思い出させた。山里教会附近は救援隊が焼死体の搬出作業に忙しかつた。手と手、足と足とを縛り、棒で担ぎ運んで行くさまは猟で獲つた鹿を運ぶような格好であつた。死体は刑務所近くと教会門前とに集められ、柴木のたきぎの上に何十という屍を積み重ねて行く。足の方はなるべく外がわにし頭を中心におくようにして。頭、胴体ばらばらになつているのも見られた。

十五日午後山里国民学校へ戦災証明書をもらいに行つた。コンクリート建の校舎がくづれ落ちて荒れ果てた校庭に長い列を作つて並び市役所の役人達から戦災証明書と米四瓩、いりこ一にぎりとを貰つた。そこで永井隆博士の消息を聞いた。頸動脈の近くを負傷して実に危険な身でありながら山里の焼跡から奥さんの骨を拾い、その足でこの山里学校へ戦災証明書をとりにきたということだつた。この日、本原町一帯にも救援隊の死体収容作業が行われ、南瓜畑の死体はどこかへ運び去られていた。夕方九大学生の甥がひよつこりたづねてきた。九大診療班として来崎したという。地獄で光明を見るという喜びはこんなものであろうか。夜は楽しく語り合いながら板の上に転つてねた。夜中俄か雨が降り出し、昼間集めておいた戸板を天井にして、四方に破れ蚊帳を張り、雨のしぶきをよけて大してぬれずにすんだ。

翌朝雨はすつかり上つてすがしがしい晴天、だがしつとりとぬれたかまどで火をたきつけるのには閉口した。温い米飯にいりこの副食という粗食ではあるが、遠来の客を交えての会食はたのしかつた。甥は夜再来を約して診療に出かけた。十時頃私も大学へ出勤、途中敵機が思いきり急降下するのには驚かされた。小児科防空壕にはもう誰もいない。壕の奥に腐爛した母子二体の屍があつた。哺乳しながらいき絶えたものと思われる。小児科廊下で平野吉に会い、無条件降伏の悲報を聞いた。昨十五日の午後、古屋野学長は諷外科の本部に全員を集めて停戦の詔勅を奉読されたということであつた。角尾学長は滑石の神社境内で重態であられるらしい。山根教授は破傷風を併発されたとか言い極めて重態、眼科病棟にねていられた。医局の整理をしているとき佐野教授が来られたので随行して病棟内を巡視した。地下室の便所汲取口の被蓋がとれて便所の中に黒いモンペを着た死体が浮いていた。仰向けだが頭は黒くむくんでいて男女の別さえ分らない。しかしおうむけに浮いている死体だから女とみるべきだろう。附近には薬局に勤めていた松岡という婦人の履歴書が散乱していた。地下室の暗室には調乳用の滋養糖が石油缶詰二、三個貯えてあつたが、これらは既に誰かに破られ、中味はすつかりぬすまれていた。徒らに潮解した滋養糖が辺りをべたつかしていた。佐野教授は調乳室から二、三斤の白砂糖が入つている缶をさがしてきて「このような貴重品は大切に保存しておけ」と命ぜられたので平野君と二人で医局の打ちひしがれた茶だんすの奥へ隠しておいた。

午後になつて本部に行つてみると医員看護婦学生十数名が治療、死亡

者の処置、事務連絡等に目覚ましく仂いてた。ここに收容の傷者達は学生及び看護婦の重傷者ばかりであつた。脳症状を呈した一少女が全裸で転々反転している様がみられ、一人残らず呻き、わめいている様は気の毒の限りであつた。裏の土手を登ると高北病棟の庭に出る。そこで死体を焼いていた。つい先程樋渡という学生も荼毘に附せられたということであつた。

敗戦という精神的打撃と終日の労仂作業とに、ひどく疲れ日暮れて家路についた。途中本原町では朝鮮人の一団が、たき火を囲んでバンザイを連呼しながら祝宴をあげていた。くやしい限りだ。戦争は終つた。敗れたのだ。男は自決を覚悟せねばなるまい。婦女子は山野に逃げかくれせねばならぬかも分らぬなど語る内に夜は更けた。

その後被爆三十五日に妻が原子病で死亡、その頃私も冷汗と飛蚊症の発作で約四十日間悩まされた。白血球は四千に減つていた。

皮膚科学教室

当時、教室員として北村包彦教授、一ノ瀬健吾助教授、金子純彦講師中山善敏助手、蕭秀河助手、楊瑤麟副手、黒木重徳副手補、技工嘱託の町田信治、間野正喜の両氏、雇の中村ハルヱ、山田春子と山田八重子、一ノ瀬睦子、崎田テル子の諸氏それに満島ユリ看護長以下二十一名の看護婦が勤務中であつた。

被爆時の狀況

北村教授、金子講師、蕭助手、楊副手、黒木副手補は看護婦数名と共に外来診察室で被爆。一ノ瀬助教授は出勤途中で被爆。中山助手は治療室で火傷を負い、一週間後、北松今福で死亡。

黒木副手補は外傷なきも翌年初め原子病のため死亡。町田氏は出勤途中の路上で爆死。

中村ハルヱ氏は医局の廊下で即死。

満島看護長は一階廊下で被爆負傷し時津の自宅で八月二十八日死亡。

野副、浜辺両看護婦は一階研究室で焼死。

肱黒看護婦は外来治療室で被爆、上半身に火傷を負い翌日皮膚科防空壕内で死亡す。

平山看護婦は一階廊下で即死。

川谷看護婦は寄宿舎に病臥中で爆死。

橋本、林、若松の三看護婦は外来で被爆し、橋本、林看護婦は北松今